# 「先生」たち—三題

「ここだけの話よ。あんたにだけよ」と念をおしても、それは皆に吹聴せよと同じだ。—それが世間の常識。「先生」とよばれる政治家たちと記者集団の間でオフレコという奇妙な常識がある。報道しないという条件下で勝手な本音をしゃべり散らかす。彼らはそれを「報道倫理」と称している。おこがましい。

常識以下の倫理があるはずがない。公的立場の者には本音と建前の使い分けは許されない。またまたそれで大臣が辞めさせられた。問題はそのツケはすべて国民の肩にかかってくることだ。

某中学。校庭の内外を大勢の母たちが草取り、落ち葉掃き。こんな異様の光景も今では当たり前になっている。なぜ生徒たちにさせないのか。教育は師弟一緒に汗を流す、働くことから始まる。それを知らない母たちではあるまい。反対を叫ぶとわが子が内申書で決定的な被害を加えられる。それが怖いのだ。事実、「先生」の意趣返しの内申書は人の子の一生を貫く暴力である。

車の胴体に書かれている文字はほとんどが、進行方向を中心に左側は当たり前の左書き、右側は逆に右書き。全くむちゃくちゃ。向こう側を右書き「カソリック〇〇幼稚園」と大書した送迎車。幼児教育への無神経無恥を自分でさらして走っている。二例はわが居住地別府市のこと。

いわゆる「先生」たち（医師や弁護士も）は弱い者相手でついごう慢になり、国益を損じ、ひとの一生を左右し、打撃を与えかねない。その罪過から免れ、先生に値するためには、まず相手に謙虚に学ぶことである。

（一九九五年十二月一日）